

日本人の志



京都、こころここに

vol.37

信念に誠実に生きる

京都大物質-細胞統合システム拠点長

中辻 憲夫さん



なかつじ・のりお 1950年和歌山県橋本市生まれ。京都大理学部卒。同大学院博士課程修了。国立遺伝学研究所教授、京大再生医科学研究所教授・所長などをへて2007年から現職。国内で初めてヒトES細胞株の樹立に成功。

インテグリティ 欠如は欧米では最大の非難に

京都大物質-細胞統合システム拠点 iCeMSは、文部科学省の「世界トップレベル研究拠点」の一つとして2007年に設置された。ES(胚性幹)細胞やiPS(人工多能性幹)細胞などの細胞科学と、メソ(1ナノびく1マイクロ)領域の物質科学を統合し、新たな学際領域を作り出すことが大きな研究目標だ。数多くの研究論文を既に、著名な科学誌に発表している。



これまで日本に無かった新しい研究組織を実験的に作り出すことも、iCeMS(サイエンス)の役割だと思っている。科学に関するコミュニケーション能力

主流に遠慮せず客観合理的に 自己利害超え主張する勇気を



最先端の研究が進む京都大 iCeMS。科学者の役割と責任が論じられることも(京都市左京区)

の研究を進める「科学コミュニケーショングループ」を設けたこともその狙いだ。さらに、周辺事業として09年から「インテグリティセミナー」を開催している。インテグリティは、辞書

そのことは端なくも、昨年3月に起きた東京電力福島第一原発の事故で露わになった。昨年暮れ、英国の科学誌「ネイチャー」がこの事故を取り上げている。表紙には、東電が国会に提出した黒塗りの「操作手順書」が、日の丸をバックに紹介された。日本の科学者として恥ずか

「研究科横断授業」として企画した。その冒頭で私は、「科学者の生き方と責任」のテーマで講義し、科学者には、さまざまな問題について客観的合理的に考え、勇気をもって発言する役割と責任があることを指摘した。主流意見に遠慮して沈黙することで、誤った意見や方針の再検討が先送りされれば、本来避けられるはずの被害が甚大になるからだ。

黒塗りの操作手順書

日の丸背景の

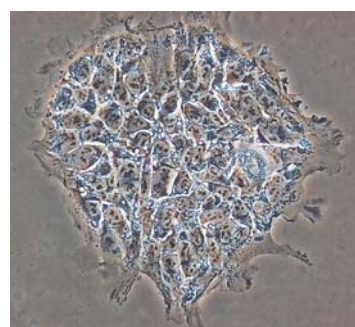
09年のインテグリティセミナーは、公開講演会の形にした。講師には科学哲学者の村上陽一郎東京大名誉教授や、アホウドリ復活にたった一人で取り組んだ長谷川博太郎大教授たちを招き、研究者や一般の人たちと科学者の役割を話し合った。

では「高潔」「誠実」など訳されている。人におもねることなく自ら考え、バランスよく判断し、信念に誠実に行動することのようだ。欧米の政治家や専門家にあって、「インテグリティが無い」というのは、このうえない非難の言葉になるという。

空気を読み 自己規制する 集団行動パターン

原発への懸念は早くからあった。例えば、湯川秀樹博士たちとともに素粒子論を開拓した研究者、坂田昌一博士は戦後、原子炉安全審査委員を務めたが、原子力委員会の方針を批判して辞任した。坂田博士は半世紀も前に、原子炉の安全審査機構が原発推進側から独立していないことの不備を指摘している。が、その提言はうまく生かされなかった。

東日本大震災で日本人は、お互い思いやりながら一丸となって行動し、世界の称賛を受けた。しかしその美質は時として、空気を読んで自己規制する集団行動パターンにつながる。激動が続く現代日本では、自らの信念を誠実に、主張すべきことは自己の利害を超えて主張する勇気も求められている。



ヒトES細胞の集団

戦後、日本人は物の豊かさ引き換えに大切なものを忘れてきたのではないだろうか。日本人が忘れつつある価値観が今も生き続ける千年の都・京都から温故知新の知恵を発信する。(毎週日曜日に掲載します)

日本の暦

社日

きょう18日(旧暦2月26日)は春の「社日」。産土神(土地の守り神)を祀る日。地方によっては、この日に農耕の仕事をお休みするところもあるようです。

社日は、彼岸や土用など九つある雑節の一つです。春秋の2回あり、春分と秋分に最も近い「戌(つちのえ)」の日が選ばれます。

「社」は産土神を指し、昔は春の社日に神前に五穀の種を供え豊作を祈る儀式が広く行われました。

島根県出雲地方のように、集落ごとに五角形の石塔を建て、今も「社日さん」としてあがめる社日信仰の盛んなところもあります。春の社日にお酒を飲むと、耳がよくなるという言い伝えもあるそうです。

リレームッセージ



長楽館館主 土手 素子さん

「ほんまもん」の文化

「京都人は怖い」といわれます。例えば、役者さんたちは口を揃えて、「京都のお客様は怖い」といわれます。それはきっと京都人の「ほんまもん」を見分ける目を意識していることではないでしょうか。

京に都が出来て1200年余り。以来貴族が職人を育て、職人が民衆の見る目を育て、反対に、目の肥えた民衆が職人を育て、職人が貴族にその腕を發揮する。この切磋琢磨の構図は、衣・食・住をはじめ、芸術・技術ほかあらゆる分野に及び、その繰り返しが京都人の審美眼を育て、いつの間にか京都の街そのものに本物志向の文化が根付いたのだと思えます。旅行者に京都が喜ばれるのは、そこに「ほんまもん」から滲み出る何かを感じるからでしょうか。

何かのキャッチコピーに「日本に京都があつて良かった」というのがありました。日本人の多くが忘れかけている「ほんまもん」が京都にはまだまだ残っているからでしょう。この言葉をずっと言い続けて頂きますよ。私達も切磋琢磨し、先人が残してくれた「ほんまもん」の文化をただ残すだけでなく、より大きく育ててゆかなければと思えます。

(次回3月25日のリレームッセージは西陣暮らしの美術館「富田屋」代表の田中峰子さんです)

(日本人の忘れもの)は、京都新聞ホームページ http://kyoto-np.jp/kp/kyo-ndp/info/nwc/に載せていただきます。



“光”ひろがる。ひびきあう。

一人ひとりの、あなたへ 一つひとつの、想いへ

お客さまの期待に、応え続けること。その決意を胸に。いま、この瞬間に、想いをこめる。NTT西日本は、これからも、安心と信頼を、すべてのお客さまへ。



いつも、あなたの、そばにいる。NTT西日本 京都支店



Major League Baseball trademarks and copyrights are used with permission of Major League Baseball Properties, Inc.